

# 巻頭言

## 「メンテナンスということ」

理事長 新谷 友良

40年を超えて住み続けているマンションはいろいろなところにガタが来ていて、去年大規模修繕の予定でしたが、オリンピック・パラリンピックもあるので1年延期されました。これに加えて、現在のコロナ感染拡大でどうなるのかと思っていましたが、管理組合・管理会社が割合しっかりしていて、今年7月実施という連絡が来ました。

それに合わせた訳ではありませんが、我が家もさまざまところのほころびが目立ち、10月からカーペットの交換、ソファの入れ替え、ベッドの修繕をして、年明けの箆笥の扉修理で漸く一段落しました。職人さんはマスクをつけて、換気のために窓を開け放った中での仕事で、いつもより大変だったと思います。

会社生活で2年間、メンテナンス部門の仕事をしました。それまで、生産・販売部門ばかりでしたので、戸惑うことが多くありましたが、今までの考え方を変える非常に貴重な経験でした。得意先が放送局でしたので納入した製品がうまく動かないと放送事故・停波ということになり、時間を問わない対応になります。簡単に復旧しない、まして納入した製品不具合が原因となると、会社上層部が出向いての陳謝になります。一方、放送局にとっては視聴者・スポンサー・監督官庁への対応が大仕事で、一刻も早い対応が求められて、修理に当たっては放送局も我々も一心同体です。そのため、無事復旧したあとの信頼感は、開発や販売部門を越えるものがあり、放送局とメンテナンス部門の結びつきは、大変強固に感じます。

いま、各方面で取り組まれている「持続可能な開発目標（SDGs）」では、持続性（sustainability）が強く言われます。「成長を持続させるためには、現在あるいろいろなものを維持・継続していかなければならない」ことが重視され、「つくる責任、つかう責任」が掲げられています。

メンテナンスは、ものをつくる側も受け持ちますが、つかう側の毎日の整理・整頓・清掃が基本とされます。このことは、我が家のガタのきた家具であれ、鉄道会社や放送局の大掛かりな装置であれ、異なるものではないと思っています。もっと言えば、形あるものを越えた私たちの協会のような組織も同じことで、毎日の整理・整頓・清掃を怠れば、組織は綻び、持続は困難と思っています。